

5世紀の丹波と西日本

—中期古墳時代の変化と画期—

細川康晴

1 はじめに

昭和63年夏、京都府の北部・北丹波の由良川流域に所在する私市円山古墳が、甲冑を有する京都府内最大の円墳として注目を集めたことは記憶に新しい。その後、概要報告も刊行され、円山古墳は北丹波における中期古墳時代を全く塗り替える存在として大きな問題を提起した。ここでは、円山古墳の年代的¹位置付けを再確認することから出発し、当該期の円山古墳の位置、さらに西日本の中で円山古墳がどの程度の階層に属し、どのような位置が与えられるのか、一定の評価を素描してみたい。もとより、このような広い地域を扱うテーマは本来膨大な資料を駆使して行うべきものであり、特に本文中で取り上げた各古墳個々の年代的¹位置については、厳密に根拠を示し吟味する問題であるが、本小論の性質上あくまでも素描という形で予察的見解を提示し、問題点を明らかにしたい。

2 築造年代の再検討

私市円山古墳の「概報」では、「6 小結 (3)築造年代」の項で、古墳の築造時期について触れている。ここでは、各主体部出土遺物の「セット関係」を重視し、さらに墳丘に樹立された埴輪を「共存」として捉え、年代考定へと導いている。結論として、「出土遺物からみると、主体部出土の遺物が中期の中でもやや古い様相を持ち、墳丘の埴輪がやや新しい様相を持つといえる。こうした点から、古墳の築造時期は、古墳時代中期中頃(5世紀中葉)前後と考えておきたい。」(傍点筆者)と結んでいる。

次に、円山古墳の年代を考えるにあたって、基本的な構成要素を抽出する。

1. 立地・墳丘築成・墳形・外表施設に関すること。
 - a. 立地は丘陵頂部。
 - b. 墳丘築成は大部分が地山削り出し。
 - c. 墳形は大型円墳(造り出しを伴う)。
 - d. 外表施設として葺石・埴輪を伴う。
 - e. 円筒埴輪はB種ヨコハケ。黒斑なし。須恵質埴輪あり(11/150)。

2. 各主体部に共通すること。
 - a. 第1・第2主体部は、ともに部分的に被覆粘土を伴う組合式木棺。
 - b. 鏡は第1・第2主体部とも小型仿製鏡を持つ。
 - c. 短甲は第1・第2主体部ともに三角板革綴式短甲を1領ずつ持つ。
 - d. 鉄鏃は長頸鏃を含まない。
3. 第1・第2主体部間の相違。
 - a. 第2主体部は農工具(鉄鎌は直刃鎌のみ含む)を持つが、第1主体部は持たない。
 - b. 第2主体部は刀のみ持つ。
 - c. 第1主体部のみ胡籙金具を持つ。
 - d. 第1主体部のみ鹿角装鉄剣を持つ。
 - e. 玉類の穿孔法は、第2主体部の勾玉は1/7が両面穿孔。第1主体部の管玉は、3/4が両面穿孔の他は片面穿孔である。

この中で、円山古墳の年代的位置を特に明確にするものは1-eの埴輪、2-dの鉄鏃、3-aの直刃鎌などである。

中期古墳の築造時期を小様式に細分するとき、大別様式を考える上で、多くの古墳に普遍的に共通する円筒埴輪の型式がメルクマールとなることが多い。円山古墳の埴輪は無黒斑・B種ヨコハケという要素をあわせ持つもので、川西編年Ⅳ期の中に含めて考えることができる。²川西編年Ⅳ期に並行する埴輪を持つ古墳は、中期を4細分した場合、その後半期にあたるが、長頸鏃の有無によりさらに2分することが可能である。³今仮に前者を中3期、後者を中4期としておくと、中3期の開始を具体的に規定するものは、棺形態としては、長持形石棺のうち、久津川車塚棺・新庄屋敷山棺を典型とする棺蓋短側面が屋根形に傾斜するタイプである(仮称・新式の長持形石棺)。副葬品としては、甲冑における鋳留技法の採用による三角板鋳留短甲・鋳留衝角付冑、眉庇付冑、挂甲、古式の馬具、帯金具などを挙げることができる。農工具としては、曲刃鎌の採用、ほかに初期須恵器の存在なども挙げられる。しかし、いずれにしても、中期の技術革新によるこれらの副葬品目の刷新・増加は、副葬品の組合せにおいて、かならずしも同時的に起こり得ることではないので、今挙げた要素を持たない古墳は古く編年されるきらいがある。ほかに北部九州では、福岡県石人山古墳に始まり、筑後・肥後地域の首長墓クラスの前方後円墳に好んで採用される妻入り横口式家形石棺の採用もこの時期を画する重要な要素である。⁴

一方、中4期は、中期の終末を規定する時期である。棺形態からは、阿蘇熔結凝灰岩を用いた古式家形石棺の畿内への搬入、副葬品としては、第1に、長頸鏃の一般化、横板鋳留短甲の普及、胡籙金具の出現などにより規定できる。

従って、長頸鎌・曲刃鎌を持たず、後行する第1主体部のみ胡籙金具を持つ円山古墳は中3期から中4期の性格をあわせ持つものであり、その築造の上限は、中3期の中にあり、2主体部間の埋葬の年代に著しい開きがなく、甲冑が、第2・第1のいずれの被葬者にも旧式の甲冑が供給された場合は、4期のなかに築造年代を考えねばならないが、曲刃鎌・長頸鎌を含まないことから、中3期の中で築造年代を捉えておくのが妥当であろう。

以上、円山古墳の編年的位置について再検討の余地の有無を検討した。ちなみに、円山古墳と同じ中3期の古墳は図示した他に、京都府久津川車塚古墳、恵解山古墳、大阪府誉田山古墳、奈良県ウワナベ古墳などを挙げうる。円山古墳をはさむ前後の時期の古墳は、円山以前の中2期が奈良県市庭古墳・ヒシアゲ古墳・コナベ古墳・室大墓古墳、大阪府仲ツ山古墳・石津丘古墳などが挙げられる。円山に続く中4期は、大阪府大山古墳・市の山古墳ということになるだろうか。

3 円山古墳と5世紀の丹波

北丹波(京都府北部の由良川中流域)における円山古墳の位置は、古墳時代を通じて、最大規模の墳丘を持つものであることに異論はない(中1期以前の丹後半島の巨大古墳は除く)。しかし、西丹波の兵庫県雲部車塚古墳を含めて考えると少し事情は異なってくる。ここでは、円山古墳の存在する由良川中流域(京都府綾部・福知山盆地)を中心に、5世紀段階の丹波の中で円山古墳成立の事情を検討してみたい。

由良川中流域の中期古墳時代前後の首長墓系列を抽出すると、綾部市菖蒲塚・聖塚・私市円山・福知山市妙見1号・綾部市殿山1号・高槻茶臼山古墳などがその候補となる。この中で、編年序列について検討してみると、まず、円山古墳以前の古墳として、有黒斑埴輪を持つ菖蒲塚・聖塚の両古墳を挙げ得る⁵。両者の先後関係については、にわかには決し難いので、今ここでは両者の相次ぐ築造=2世代にわたる首長墓として確認するに留める。円筒埴輪による編年観からは、いずれも、有黒斑、断続ヨコハケの埴輪を含み、川西編年Ⅲ期のなかに収めて考えることができる。また、菖蒲塚古墳からの埴輪以外の出土遺物ないし埋葬施設の内容は知られていないが、聖塚古墳については、埋葬施設の構造は粘土槨に類するものと推定され、仿製神獸鏡・三角板革綴式短甲などの遺物の出土が知られている。また、この2古墳は、方墳でありながら、段築・葺石・埴輪の外表3要素と周濠を完備する古墳としては、北丹波唯一の存在である。以上のことから、菖蒲塚古墳・聖塚古墳の2古墳の相次ぐ築造は、由良川流域における中期古墳時代の開始を規定するものであり、中2期の古墳として位置付けられる⁶。

次に円山古墳以後の古墳として、須恵器の出土を伝える高槻茶臼山古墳、無黒斑埴輪を

持つ妙見1号墳が挙げられる。

高槻茶臼山古墳は、葺石も埴輪も持たない可能性が高いが、後円部から須恵器の出土が伝えられている。この須恵器が、古墳の築造年代を示す手懸りであるとするれば、後1期の古墳として位置付けることが可能である⁷。高槻茶臼山古墳は、由良川流域最大の前方後円墳であり、その立地も由良川流域から伊佐津川流域へ抜ける合流点付近にあたり、交通の要衝に立地するものであると言える。

一方、妙見1号墳は、群中に、横穴式石室を有する前方後円墳を含む古墳群の築造契機となり得た古墳である⁸と考えることができる。後期群集墳につながり、群形成の過程で、横穴式石室の採用を見るため、円山と同じ、川西編年Ⅳ期の埴輪を持つが、円山よりわずかに後行するものとして位置付け、中4期の築造と推定しておきたい。

また、埴輪も葺石も持たない殿山1号墳⁹は、遺物も全く知られていないため年代考定の根拠がない。しかし、近年調査された、福垣北古墳群からは、小古墳から、初期須恵器に含めて考えられる例が確認できたので、これを広義の以久田野古墳群の群形成の1点と捉えることが可能ならば、立地からは、おそらく以久田野古墳群の築造契機の一つとなったであろう殿山1号墳は、墳形からも、円山古墳と同時期か、やや後行するものと推定しておきたい。

以上の結果を整理すると、由良川流域における中期古墳時代の開始は、菖蒲塚古墳・聖塚古墳の大型古墳の相次ぐ築造に始まり(中2期)、同時にこの影響下に成立する福知山市八ヶ谷古墳(琴柱形石製品を有する方墳)¹¹、あるいは前代的な大型円墳の綾部市政次1・2号墳(直径40m・鉄剣片・堅櫛のみ副葬)¹²など集団間において墳丘形態の相違、墳丘規模・埋葬施設・副葬品の格差が認められるが、前方後円墳は1基も築造されず、前段階における福知山市広峯15号墳¹³で確認された前方後円墳の採用が可能であった首長墓系列は現状の資料による限り系譜の断絶したものと捉えられかねない。

次に、私市円山古墳(中3期)の築造を見ると、円山古墳周辺は、従来、前半期古墳の空白地域であり、円山の系譜に直接かかわる前後の時期の古墳が、大型古墳はもちろん、対岸2.5kmの新たに確認されたヌクモ古墳群を除き中小規模の古墳さえも、同一小地域内には確認されていない。すなわち円山古墳の築造は、点的に突発的に築造され、その立地は、由良川本流を見下ろす丘陵上の好立地であり、前半期古墳の立地が、時には居住地を大きく離れ、全て政治的なものである中でも、その性格はきわめて政治的側面のみが強調されていることを確認しておきたい。さらに、円山古墳以後の由良川中流域では、大型前方後円墳は築造されず、円山古墳により掌握された地域首長権が解体されたことは、円山古墳以後の地域首長墓が殿山1号墳、高槻茶臼山古墳などの全長30~50m級の中小規模前方後

円墳の群立することに体现されている¹⁴。

一方、南丹波(大堰川・桂川水系の京都府亀岡・園部盆地)は、標高500m前後の丹波高原により北丹波とは地域を隔てている。顕著な中期古墳は、その前半(中2・3期)では全てが方墳である¹⁵。そして、この方墳優位の形勢を打ち消すかのように、突如として築造されたのが、南北丹波の接点にある後円部直径80m・全長140mを測る雲部車塚古墳¹⁶である。これは古丹波(丹波・丹後)の中期古墳のうち最も巨大であり、かつ突出している。北丹波で最大の前方後円墳、高槻茶臼山古墳(後円部直径34m・全長54m)、南丹波最大の千歳車塚古墳(後円部直径41m・全長79m)¹⁷と比較してもその格差は圧倒的である。そして、雲部車塚古墳もまた、私市円山古墳と同様に、同一小地域内に、直接系譜をたどれる首長墓が一切存在せず、生産基盤から遊離したきわめて政治色の強い古墳であると評価できる¹⁸。

一方、丹後半島では、円山古墳の築造時期には、すでに古墳は、大型円墳さえも築造されない¹⁹。しかし、後野円山1・2号墳は、小規模ながらも、葺石・埴輪・周濠の外表3要素を確実に完備していることを評価するならば、地域首長墓の規模の極端な縮小化したものと捉えられる。丹後半島の地域首長墓の規模の極端な縮小化はすでに前段階から始まっており、竜山石製でない在地型の長持形石棺を直葬する直径56mの円墳である産土山古墳の存在から、棺形態の採用について認められる階層の高さを保持しながらも、前方部を付設できないばかりか、墳丘直径規模も大きく縮小している²¹。

このように、北丹波における私市円山古墳の出現は、由良川の水運を掌握する交通の要衝に立地する独立的な地域首長墓であると捉えられその墳形が前代までの方形を基調とするものではなく、円形墳でありその存在意義は小さくない。

以上、地域最大の円墳、私市円山古墳の成立意義を北丹波という中地域の中で位置付けた。もちろん、私市円山古墳の成立については、円山古墳の被葬者である中地域を支配する首長が独自に造墓を行い得たとは考えにくい。以下に、西日本のいくつかの地域を選んで、5世紀の動向と画期を探ってみたい。

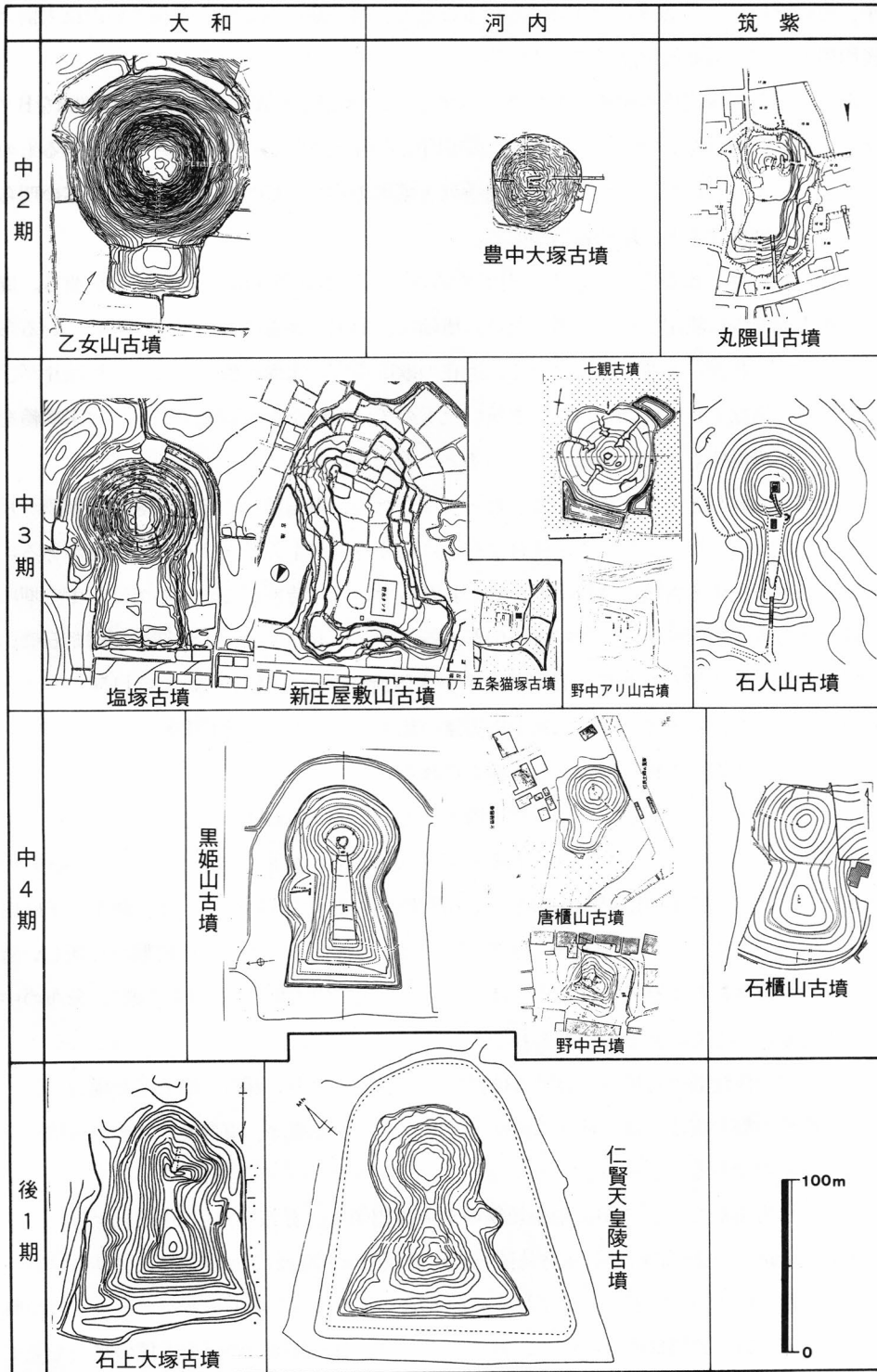
4 中期古墳の様相

大和 大和の中期古墳の実態を考えると、その分布の比重に即して、盆地北部の佐紀盾列古墳群、盆地西南部の葛城地域を中心に検討してみたい。

佐紀盾列古墳群は、群中最大規模である前4期と推定され、当該期の大王墓の有力候補とされる五社神(伝神功皇后陵)古墳から群の形成が開始された巨大前方後円墳を群の中核とする古墳群である。全長200mを超す巨大前方後円墳を7基も含んでいることは、佐紀盾列古墳群成立の事情を考えると、畿内中枢勢力と無関係に成立したものとは考えられ



第1図 丹後・丹波の中期古墳の規模の比較



第2図 大和・河内・筑紫の中期古墳の規模の比較

ず、その立地が、山陰道の入り口にあたることと、同時期に成立する丹後半島の巨大前方後円墳との相互関連性が注目されている²²。

今ここで前方後円墳の規模を墳丘長で示すと、200m以上をAクラス、150～200mをBクラス、100～150mをCクラスとすると、私市円山古墳と同程度の後円部直径を有するものは、墳丘全長ではCクラスとなる。佐紀盾列古墳群の中で、Cクラスの古墳で内容の明らかなものを抽出すると、塩塚古墳がある。

塩塚古墳は粘土槨を有する前方後円墳である。後円部直径70m・全長105mを測る。周濠は後円部のみに設定され、全周しない。埴輪は、過去の調査においては知られているらしいが、樹立状況など明らかではなく、近在の歌姫横穴の床面に敷かれた円筒埴輪片が、この古墳に樹立されていたものを引き抜いたものではないかとの指摘もあり、本来埴輪を有していた可能性もすでに指摘されているところである²³。

主体部の副葬品として、盗掘をこうむっていたため、刀剣類の1部と鉄製農具類が残されるのみであった。この中で、注目すべきは、4点の蕨手刀子と9点の曲刃鎌がある。蕨手刀子を出土する古墳は概ね中期全般にわたっている。時期が古いものでは、中1期に位置付けられる福岡県老司²⁴・鋤崎古墳例²⁵がある。新しいものでは、中4期の福岡県石櫃山古墳例となる。1墳からの出土量が最も多い大阪府アリ山古墳からは、合計156点が出土している。アリ山古墳では、直刃鎌と曲刃鎌の比率がほぼ等しく(直刃鎌71・曲刃鎌68)、中3期から中4期への移行期であると捉えられる。

蕨手刀子はもちろん、すべての中期古墳から出土しているわけではなく、副葬品のセットが判明しているもののなかでも、京都府産土山古墳(中2期)²⁷、奈良県五条猫塚古墳(中3期)²⁸、大阪府黒姫山古墳²⁹・野中古墳³⁰・岡山県隋庵古墳(中4期)³¹などでは、蕨手刀子は出土していない。従って、蕨手刀子の分布と時期は、北部九州では、古い時期から新しい時期まで、ほぼ連続して存在し、畿内では、山城の金比羅山古墳³²が古く(中2期)、分布の中心は中3期にあるといえるのかもしれない。

塩塚古墳の佐紀盾列古墳群における位置は、塩塚古墳を中3期の古墳とした場合、佐紀盾列古墳群の群形成は、既に終息に向かっており、巨大古墳は、東群のウワナベ古墳が築造されるのみである³³。

佐紀盾列古墳群では、ほかに中小規模の前方後円墳は、瓢箪山古墳³⁴(後円部径60m・全長96m・前期)、佐紀高塚古墳³⁵(伝称徳陵・後円部径84m・全長127m・前期)、猫塚古墳³⁶(復原全長約120m・前期)などと、いずれも前期古墳に含まれるものであるが、それぞれの時期には、佐紀盾列古墳群西群の中で、五社神・佐紀陵山・石塚山の巨大古墳の築造を見ているため、それらの古墳と重層的關係をなすものとして位置付けることが可能である。と

ころが、塩塚古墳の場合は、同時期に比定すべき巨大前方後円墳が西群の中には認められないことから、あえてウワナベ古墳に隣接する占地を採らずに、あくまでも西群の中に墳墓域を求めようとした点が問題となる。もちろん、巨視的に見れば、同一群内に属するものとして捨象すべき点かも知れないが、ここでは山城・丹波を経て日本海側へつながるルートの入り口である歌姫越という交通の要衝に面した立地条件を評価するとともに、塩塚古墳とウワナベ古墳の被葬者間の出自系譜の違いの可能性を指摘し、問題提起としたい。

次に、葛城山系東麓の南葛城地域では新庄屋敷山古墳³⁸の存在が注目される。屋敷山古墳は、同時期における奈良盆地南西部(南葛城地域)の最大級の前方後円墳である。しかし、前代の北半部の築山古墳・南半部の室大墓古墳などの200m級の巨大前方後円墳に比べて、墳丘規模の縮小化を招いていることは明らかで、弱体化の観は拭えない。

屋敷山古墳の石棺は、竜山石を使用し、短側板に方形突起を有する典型的な畿内型の長持形石棺であるが、形態・法量が久津川車塚古墳棺と酷似することが指摘されている。墳丘規模の上からは、屋敷山が後円部直径80m・全長145m、久津川車塚が、後円部直径113m・全長183mとその差は大きい、内面的な埋葬施設に表徴される同族系譜のなかでは、全く同質的な石棺を分有することは注目に値する。

さて、塩塚・屋敷山古墳の2基の中型前方後円墳の成立の事情と背景を検討した結果、いくつかの共通点を指摘するに至った。すなわち、大王墓を含み得る墳墓域が、大和盆地東南部(大和・柳本古墳群)から、大和盆地北部(佐紀盾列古墳群)、さらに古市・百舌鳥古墳群へと移ってゆく中で、大王墓を含み得る墳墓域以外の地域では、巨大前方後円墳の築造は終息していく。しかし、対外交渉のために交通の要衝と位置付けられるべき地域は中小規模の前方後円墳を築造し続けるのである。このようにみると、中小規模の前方後円墳の被葬者の実態が、必ずしも明らかではない現在、塩塚・屋敷山古墳の被葬者の本来属すべき階層は、塩塚古墳とウワナベ古墳の占地・墳丘規模の違いを積極的に評価し、屋敷山棺が南山城最大の墳丘規模を持つ久津川車塚古墳に採用された棺と同質的なものとするのが許されるならば、これらの中小規模の前方後円墳は、在地首長墓として築き得る墳丘規模のひとつとして位置付けることも可能ではあるまいか。そして、これら交通の要衝に位置付けられた前方後円墳の円丘部直径がほぼ等しいことに注意を払いたい。さらに、私市円山古墳もまた円丘部の直径で比較すればほぼ同クラスと言って良い。もちろん、塩塚・屋敷山クラスの前方後円墳と、私市円山古墳の後円部直径の等質性を認めた上でも、前方後円墳と円墳という墳形の違いによる相互の墳丘築成にかかわる労力は根本的に異なる。また、埋葬施設の類型も異なるため、実際には墳丘規模と埋葬施設を組合せたかなり複雑な階層構造が予想されるのであるが、階層比較のひとつの基準として、同時期に位置

付けられるべき地域首長墓の円丘部直径が等質的である点は十分注意しておきたい。

河内・和泉 佐紀盾列古墳群における造墓活動が巨大古墳としてはウワナベ古墳を最後に終息し、かわって、掖上籬子塚・新庄屋敷山古墳の相次ぐ築造を見る大和盆地西南部に大和における有力古墳の分布の中心が移るとき、これに対応して古市・百舌鳥古墳群では最大規模の超巨大前方後円墳の成立を見る。古市・百舌鳥古墳群では、巨大古墳の陪塚的位置にあるものの実態が若干知られている。すなわち、誉田丸山古墳⁴⁰・野中アリ山古墳⁴¹・七観古墳⁴²・野中古墳⁴³などがそれである。これらは、概ね、50m前後の円墳ないしは方墳で、鉄製甲冑・刀剣類を中心とする多量の武器類を埋納し、その集積の度合いは個人所有の域を大きくこえるものである⁴⁴。ここで中期古墳時代の成立に関して確認しておくこと次の3つの立場がある。

1. 長方板革綴短甲の出現をもって中期古墳時代の開始とする⁴⁵。
2. 津堂城山古墳を前期古墳とし、仲ツ山古墳の出現をもって中期古墳時代の開始とする⁴⁶。
3. 津堂城山古墳の出現をもって中期古墳時代の開始とする⁴⁷。

ここでは、津堂城山古墳に見る典型的な長持形石棺の成立をとりわけ重視し、津堂城山古墳の出現を以て中期古墳時代の開始とする立場を採りたい。

なぜなら、長持形石棺の祖形は、すでに先学の説くように、松岳山・妙見山古墳などの組合式石棺の系譜を引き、成立定形化したものであると考えられている。松岳山棺の持つ要素からは、用材のうち側石が香川県鷲ノ山石であることや、棺底に石枕が掘りだされたものであることから、松岳山棺の棺材の運搬・創出・加工に際しては、讃岐の工人が動員された可能性がきわめて高いものと考えられており、埋葬施設の製作体制と棺材の選択という点においてひとつの画期として評価されるべきものである。

しかし、津堂城山古墳の石棺は、蓋石上面に格子状彫刻を持ち、小口板(短側板)に方形突起を持ち、竜山石に用材を限って製作されるというその後の室大墓古墳・兵庫県玉丘古墳などの定型化された長持形石棺の形制を規定するものであり⁴⁹、これらの形態的特徴を備えた畿内型長持形石棺特有の棺材として竜山石の開発および生産地ならびに搬入ルートの掌握という点が確立された意義は大きく、長持形石棺の定型化完成という視点を評価するものである。

七観・アリ山・野中の3古墳は、それぞれ、石津丘(伝履中陵)、誉田山(伝応神陵)、墓山古墳の陪塚的位置にあり、それぞれの主墳の年代を示すものとして、積極的に評価されている。いずれも、鉄製甲冑・刀剣類を中心とする豊富な武器・武具類を埋納することを特徴とする。武器類の埋納庫的性格もすでに指摘されており、人体埋葬も当初からなかつ

たものと思われる。また、玉類、鏡を持たないこともこの性格を裏付ける。

このように、単に墳丘直径規模からだけでは、私市円山古墳に劣る古市・百舌鳥古墳群中の大型円・方墳は、巨大前方後円墳との関係において初めて理解でき得るものであり、独立地域首長墓である円山古墳とは直接比較の対象とは必ずしもなり得ない。むしろ、甲冑を大量副葬する黒姫山古墳の出現の時期を注意しておきたい。

筑紫 北部九州の中期古墳時代のモデルとして、筑後川流域の3つの地域について検討してみたい。すなわち、八女丘陵(人形原台地)を中心とした地域、浮羽を中心とした地域、久留米東部(高良山山麓)である。これらは、いずれも中期になって活発な造墓の展開が確認できる地域である。

八女丘陵には、筑紫君磐井の墓に比定されている岩戸山古墳を含む前方後円墳11基(現存9基)を中核とする北部九州でも有数の古墳群が存在する。福岡県に7基(うち2基は前期古墳)ある全長100m以上の前方後円墳のうち3基までがここに集中するという安定した造墓の在り方は、北部九州の中でも他に例を見ず突出している。岩戸山古墳が磐井その人の墓であることの可否は問わずとも、文献に反乱伝承として名を残す筑紫君一族に比定されるべき内容を持つ地域勢力の経営した墳墓地であることは認められよう。

八女丘陵で最初の方後円墳は、後円部直径76m・全長122mを測る石人山古墳である。⁵⁰これは、八女古墳群の築造契機となったばかりか、「武装石人の樹立・横口式家形石棺の採用」といった点において、その後の筑後・肥後北部・肥前南部の有明海沿岸の首長墓に強い斉一性を与える契機となったものであると評価されている。⁵¹石人山古墳は、早く盗掘を受けていたためか、副葬品は一切知られていないが、円筒・形象埴輪、陶質土器などが表採され報告されている。⁵²これらの成果によると、円筒埴輪には、2次調整はヨコハケで、焼成不足のため断面が黒色となっているものが知られる一方、須恵質のものも知られ、窖窯による焼成が行われている段階の埴輪であると考えられ、埴輪による編年観からは中3期の古墳として位置付けることが可能である。また、墳丘祭祀に伴うものと見られる土器群も陶質土器ないし初期須恵器の範疇に含まれるもので(池の上Ⅲ式=TK216型式)、埴輪による年代観とは齟齬をきたさない。

ところが、八女丘陵の中だけでは、石人山古墳に直接継続する首長墓系列の古墳を確認することができない。石人山古墳に後続するものとして、岩戸山古墳がある。しかし、岩戸山古墳出土の須恵器、円筒埴輪の編年観からは、石人山古墳との年代差は一世代ないし二世代の空白期を確認せざるを得ない。⁵³石人山古墳と岩戸山古墳の空白期は、久留米東部(高良山山麓)の古墳を相互補完的に考えることによって理解できる。⁵⁴

すなわち、石人山古墳に後行する首長墓として、石櫃山古墳・浦山古墳が挙げられる。

石櫃山古墳⁵⁵は、後円部直径約70m・全長100~115m(復原推定)を測る前方後円墳である。葺石の有無は明らかではないが、窖窯焼成の円筒埴輪を持ち蕨手刀子の出土が知られている。埋葬施設には、横口式家形石棺が採用されている。浦山古墳⁵⁶もまた、埋葬施設に横口式家形石棺を採用する前方後円墳として斉一性を持つが、前方部が短いものである。また、近年調査された久留米市甲塚古墳⁵⁷は、石障を有する横穴式石室を埋葬施設とする帆立貝式の前円後円墳であるが、円筒埴輪などの編年観などからは、石人山古墳と同時期の古墳と考えられる。これは、石障を有し、玄門部の石材にU字状の削り込みを有するなど肥後型横穴式石室の特質を有していることが注目される。

すなわち、久留米東部の前方後円墳の系譜は、石人山古墳と並行期の甲塚古墳に始まり、石櫃山古墳、浦山古墳と続き、石人山古墳と岩戸山古墳の間を埋める筑紫君一族の首長墓系譜に連なるものとみられるが、これらは甲塚古墳の石障や、石櫃山・浦山古墳の石棺蓋に認められる環状縄掛突起の存在から肥後中南部との関わりが深いことが注意される⁵⁸。また、前方部の短い帆立貝式古墳として位置付けられる甲塚古墳・浦山古墳を除き、石人山古墳・石櫃山古墳・岩戸山古墳の3基の前円後円墳は、前方部長は異なるものの、後円部直径については、70m級に統一されている点が注目される。また、石人山古墳に採用された横口式家形石棺と武装石人の組合せという形で体现された特質は、筑紫君一族の首長墓のその後の在り方を規定するもので、石人山古墳の築造は画期的であると捉えられ、石人山古墳の成立を見た中3期が、北部九州の中で重要な画期のひとつになっていることを改めて確認しておきたい⁵⁹。

さらに浮羽地域に所在する月の岡古墳⁶⁰は、新式の長持形石棺を有し、横刃板鋌留式短甲を副葬する後円部直径60m・全長95mを測る前方後円墳であり、中4期の古墳として位置付けられるが、棺形態として長持形石棺を採用する点が最も特徴的である。

5 ま と め

中期古墳時代は、文献史料の上からは、倭の五王の時代にあたる。古墳とその副葬品の在り方からは、これら5世紀代に比定されるべき、畿内中枢勢力の首長権の伸張に伴うものと思われる前方後円墳の拡散は、前期段階のように各部族間の連合という形で平和的に行われたものか、あるいは相当激しい武力抗争が行われた結果なのか、それぞれのケースに応じて、棺形態、副葬品の在り方が判明しない場合にはにわかに決し難いものである。

ここで、直接支配体系の変化を促した地域首長墓を再び通観すると、北丹波では私市円山古墳、西丹波では、雲部車塚古墳、南大和では新庄屋敷山古墳、八女丘陵では石人山古墳がある。あるいは河内の黒姫山古墳もこれに含めて考えることができる。これらはいずれ

れも中3期から中4期にあたり、前期以来の伝統的な首長墓の系譜とは別の新興の勢力の可能性も考えられよう。あるいは、本貫地は別の場所にあり、交通の要衝であるがために墓域を移動させたものという考え方も成り立ち得る。しかし、いずれの考え方に立った場合でも、交通の要衝である拠点に確実に古墳を築造し得るものは、それを掌握し得る者である点には変わりがない。またこの時期は、古市・百舌鳥古墳群において巨大古墳が最も巨大化する時期でもある。棺形態の上からは、畿内では、新式の長持形石棺への形式変化・採用が確認され(屋敷山・久津川車塚棺)、北部九州でも、新たに妻入横口式家形石棺の創出・採用を見る(石人山古墳)。また甲冑製作技法上からも革綴式から鋳留式の転換期にあたり、埴輪製作技法上からも、野焼きから窯窯焼成への転換期でもある。

私市円山古墳は、このような時代のなかで、他の古墳と同じように、畿内中枢勢力と直結する拠点的首長墓として築造されたが、その前後に有力な古墳の築造をみないことから、その占地自体は、由良川の水運に依拠した交通の要所に立地したものであり、生産基盤に密接しない古墳であるといえる。同時期に埴輪を有する古墳の分布の中心はあくまでも以久田野古墳群であり、その後が続く前方後円墳を中心とした小群の在り方からも複数の集団により墳墓域が営まれていることは疑いが無い。

最後に、再び各地に営まれた首長墓についてみると、大和北部の佐紀盾列古墳群中の塩塚古墳、大和南部の葛城の新庄屋敷山古墳、北部九州の八女丘陵の石人山古墳などは、私市円山古墳と円丘部の直径がほぼ等しいことが明らかとなった。これは、円山古墳が円丘部直径だけ単純に比べれば、本来地域首長墓の前方後円墳に比肩し得るものであったことを示している。古墳被葬者の属すべき階層は、墳形・墳丘規模・埋葬施設の種類・副葬品の質・量等の組合せにより複雑に決定されていたものと推定されるが、畿内中枢勢力と直接結びつき、このように重用された由良川の水運の行きつく先は、前期以来の丹後半島であったのだろうか、そして一体何が運ばれたのであろうか。

(ほそかわ・やすはる＝京都府立丹後郷土資料館)

- 1 鍋田勇ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡昭和63年度発掘調査概要(1)私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 2 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2・4号)日本考古学会 1978・79年
- 3 広瀬和雄「大王墓の系譜とその特質」(上・下)(『考古学研究』第34巻3・4号)考古学研究会 1987・88年。和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」(『考古学研究』第34巻2号)考古学研究会 1987年。時期区分についての考え方は、広瀬・和田両氏の研究の成果に負うところが大きく種々ご教示を頂いた。
- 4 柳沢一男「共通の墓制が環有明海連合政権の存在を証す」(『歴史読本』第31巻6号) 1986年

- 柳沢一男「石製表飾考」(『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』下巻) 1987年
- 5 京都府立丹後郷土資料館『両丹地方の方墳』(常設展資料4)京都府立丹後郷土資料館 1978年。谷口智樹・義則俊彦「多田古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ—由良川流域の古墳』)山城考古学研究会 1983年。中村孝行『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第11集)綾部市教育委員会 1984年。平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 6 細川康晴「丹波の前期古墳」(『園部垣内古墳』『同志社大学文学部考古学調査報告』第6冊)同志社大学文学部文化学科 1990年
- 7 奥村清一郎「茶臼山古墳」(『丹波の古墳Ⅰ』前掲注5)
- 8 海老瀬敏正・石井清司・常盤井智行「妙見古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ』前掲注5)
- 9 黒田恭正・常盤井智行ほか「以久田野古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ』前掲注5)
- 10 石井清司「福垣北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第31冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年。田代弘「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(3)福垣北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第36冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 11 平良泰久「八ヶ谷古墳」(『丹波の古墳Ⅰ』前掲注5)
- 12 長谷川達「政次1号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集)綾部市教育委員会 1981年
- 13 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書』(『福知山市文化財調査報告書』第16集)福知山市教育委員会 1989年
- 14 常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」(『丹波の古墳Ⅰ』前掲注5)
- 15 奥村清一郎「大堰川水系における前・中期古墳の動向」(『日野昭博士還暦記念論集歴史と伝承』) 1988年
- 16 奥村清一郎「丹波」(『歴史公論』第9巻3号) 雄山閣 1983年。奥村清一郎「亀岡盆地」(『日本の古代遺跡 27 京都1』)保育社 1986年
- 17 梅原末治「千歳村車塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊)京都府 1923年
小池寛「千歳車塚古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
- 18 瀬戸谷皓『日本の古代遺跡 1 兵庫北部』)保育社 1982年
- 19 細川康晴・森正・杉原和雄「京都府の円墳」(『古代学研究』第123号)古代学研究会 1990年
- 20 佐藤晃一ほか「後野円山古墳群発掘調査報告書」(『加悦町文化財調査報告書』第4集)加悦町教育委員会 1981年
- 21 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査」上・下(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』20冊『京都府文化財調査報告』第21冊) 1940・1955年
- 22 川西宏幸「前期畿内政権論」(『史林』第64巻第5号)1981年 関川尚功「大和における大型古墳の変遷」(『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第11冊)橿原考古学研究所 1985年
関川尚功「古墳時代ヤマトの範囲と対外関係の推移」(『網干善教先生華甲記念考古学論集』) 1988年
- 23 伊達宗泰・北野耕平「塩塚古墳」(『奈良県文化財報告』1) 1957年。奈良市史編集審議改編『奈良市史』考古編 1968年。河上邦彦・今尾文昭「奈良市塩塚古墳」(『奈良県遺跡調査概報』1978年度)1979。河上邦彦「佐紀盾列古墳群(『探訪日本の古墳西日本編』)有斐閣 1981年。『大和の埴輪』(特別展図録第22冊)奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1984

- 年
- 24 小田富士雄ほか『老司古墳』（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第209集）福岡市教育委員会 1989年
 - 25 柳沢一男・杉山富雄『鋤崎古墳』（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第112集）福岡市教育委員会 1984年
 - 26 北野耕平「野中アリ山古墳」（『河内における古墳の調査』『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第1冊）1964年
 - 27 前掲注21
 - 28 網干善教『五条猫塚古墳』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第20冊）奈良県教育委員会 1962年
 - 29 末永雅雄・森浩一『河内黒姫山古墳の研究』（『大阪府文化財調査報告書』第1輯）1953年
 - 30 北野耕平『河内野中古墳の研究』（『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第2冊）1976年
 - 31 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葎子『総社市隋庵古墳』総社市教育委員会 1965年
 - 32 吉本堯俊「金比羅山古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1965年）京都府教育委員会 1965年。宇治市歴史資料館編『よみがえる古墳文化』宇治市歴史資料館 1986年
 - 33 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅵ（『奈良国立文化財研究所学報』第23冊）奈良国立文化財研究所 1974年。伊藤勇輔「ウツナベ古墳外堤」（『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅰ『奈良県文化財調査報告書』第28集）奈良県教育委員会 1976年
 - 34 河上邦彦「奈良市瓢箪山古墳の調査」（『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅱ『奈良県文化財調査報告』第30集）奈良県教育委員会 1978年
 - 35 『奈良市史』考古編 前掲注23
 - 36 中村春寿・小島俊次「奈良市佐紀町猫塚古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12輯）1969年。『奈良市史』考古編 前掲注23
 - 37 前掲注22
 - 38 菅谷文則ほか『新庄屋敷山古墳』奈良県新庄町教育委員会 1975年
 - 39 『新庄屋敷山古墳』前掲注38
 - 40 田中晋作「菅田丸山古墳と『応神陵』」（『末永先生米寿記念献呈論文集』）1985年
 - 41 「野中アリ山古墳」前掲注26
 - 42 末永雅雄「七観古墳とその遺物」（『考古学雑誌』第23巻第5号）1933年。樋口隆康ほか「和泉国七観古墳調査報告」（『古代学研究』第27号）古代学研究会 1961年
 - 43 『河内野中古墳の研究』前掲注30
 - 44 藤田和尊「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」（『橿原考古学研究所論集』第8号）吉川弘文館 1988年
 - 45 柳本照男ほか『大塚古墳』（『豊中市文化財調査報告』第20集）豊中市教育委員会 1987年
 - 46 広瀬和雄「大王墓の系譜とその特質」前掲注3
 - 47 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐる」前掲注3
 - 48 小林行雄「河内松岳山古墳の調査」（『大阪府文化財調査報告書』第5輯）大阪府教育委員会 1957年。間壁忠彦・間壁葎子「長持形石棺」（『倉敷考古館研究集報』第11号）倉敷考古館 1975年。田中英夫「長持形石棺の再検討」（『古代学研究』第77号）1975年
 - 49 前掲注48
 - 50 武藤直治「石人山古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第8輯）1932年。武藤直治・鏡山猛「筑後一條石人山古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第12輯』）1937年。小林行雄「石人山古墳」（『装飾古墳』）平凡社 1964年

- 51 前掲注4
- 52 佐田茂「八女古墳群出土の埴輪」(『立山山古墳群』『八女市文化財調査報告書』第10集) 1983年。川述昭人「付編 石人山古墳出土遺物」(『瑞王寺古墳』『筑後市文化財調査報告書』第3集)筑後市教育委員会 1984年。牛嶋英俊「筑後石人山古墳出土の陶質土器」(『古文化談叢』第15集)九州古文化研究会 1985年
- 53 小田富士雄「磐井の反乱」(『古代の日本』3)角川書店 1970年。小田富士雄「筑紫君磐井とその周辺」(『古代筑紫の検討』『古代を考える』38)古代を考える會 1984年。小田富士雄「考古学から見た磐井の乱」(『古代最大の内戦磐井の乱』)大和書房 1985年
- 54 柳沢一男「筑紫」(『季刊考古学』第10号)雄山閣。柳沢一男「福岡県の円墳」(『古代学研究』123号)古代学研究会 1990年
- 55 渡辺正気ほか『石櫃山古墳』(『福岡県文化財調査報告書』第41集)福岡県教育委員会 1969年
- 56 浜田耕作「筑後国三井郡上津荒木村二軒茶屋の古墳」(『九州に於ける装飾ある古墳』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊)京都帝国大学文学部考古学研究室 1919年。森貞次郎「浦山古墳」(『装飾古墳』平凡社)1964年
- 57 『甲塚古墳発掘調査現地説明会資料』久留米市教育委員会 1989年。松村一良氏の御教示による。
- 58 柳沢一男「肥後型横穴式石室考」(『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』) 1980年
- 59 佐田茂「筑後地方における古墳の動向—在地豪族の変遷—」(『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』) 1980年
- 60 福尾正彦「筑後月の岡古墳とその周辺」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』) 1982年。児玉真一・平川佑介『若宮古墳群』I 吉井町教育委員会 1989年